

OCUAC

大阪市立大学山岳会会報

NO.

37

2003.12.1

カトマンドゥにも秋がきて、事務所のテラスからも、ランタンリルンのピークが少しだけ、見える季節になりました。

仕事で疲れた目を休めるためにテラスに出ると、ポプラの木の横から、真っ白のリルンの穂先が見えます。

あの頂上を見る度に、森本隊長や、大島健司さんのことが胸を掠めます。昨年4月、JICAのシニア・ボランティアとして、ネパールに赴任する時には、これで、ランタンの墓参りにいけるなと思ったものでした。

(アイランドピーク登頂より)



(OCUACホームページから転載)

2003年夏山合宿を終わって

8 / 18 - 24 (湊沢にて)

2003 / 9 / 6

佐々木惣四郎

ひさかた振りの新人を迎えての夏山合宿であり張り切っていたら、佐々木が出発前に突然の腰痛に襲われて縦走に参加できなかった。何とか一か八かで合宿に参加したが、うまい具合に腰痛が悪化せず日程をこなす事ができた。現役4人の頑張りによるものであるがOB3人の参加で何とか意義ある形にできたものであり、若干の反省と今後のあり方を含め報告致したく。

<メンバー> CL (OB) 佐々木惣四郎

SL 小椋 剛, 木野 英史, 澤 真平、江崎 香野子

岡本 恒夫 (OB)、山田 裕敏 (OB)、 藤村 達夫 (OB)、

<日程>

8月18日 大阪難波OCAT 21:00 信州さわやか号にて出発。江崎さん京都より乗車。

19日 6:00上高地着6:45出発—横尾(9:30—10:00)—湊沢
14:15

霧雨が降る中、入山のボッカを始めた。団体装備、食料は一人平均10—12Kであったが、小椋君の個人装備がとてつもなく多く、ザックの調子が良くない事もあり、徳沢でバテ、山田、澤にてサポート。屏風のカベも雨で見えず黙々と湊沢に向かった。なお、縦走用食料10Kを横尾小屋にデポした。

入山は今回のキーポイントであったが、結果として、苦しいボッカにかかわらず全員良く頑張り、雨模様の中テント場に辿り着いた。

20日 6:45北穂東綾へ出発—最低コル9:40—北穂(11:30—12:15)—テント14:00

絶好の天気の中、全員とOB岡本さんの8名にて東綾へ。取り付きが心配であったが、案の丈最低コルへでる際のルンゼに意外とてこずった。カンペではルンゼ左がのっていたが、小石で落石が恐く、右側の岩尾根を辿った。

コルからは藤村、岡本、江崎のグループがゴジラの背をパスしてゆきあとの5人は忠実に背をいったが、スリルのあるところは僅かばかりであった。やはり、コルにでるのが最大の難関であった。

21日 3:30起床—出発スタンドバイ5:00—沈殿

北尾根にゆくべく準備終えるも雨が降り止まず沈殿。8時ごろより現役がトランプを始め、延々7—8hしていた。スコア表を撤収時に見たら64回もゲームをしており、考えられない事態に仰天さされた。

沈殿で個人装備がイロイロだされたが全く多様な装備がだされ、これまたビックリ。つまり、個人装備が普通に比して2—3K強は多い感じ。

22日 3:30起床—5:15出発—5, 6コル7:00—前穂11:15—奥穂13:50—テント16:00

再度天気恵まれコルに四パーティのうち第3パーティでついたが3峰の登りでは第一パーティで出発。トラバースせずそのまま稜に沿って登るもチョックストーンでさえぎられ左に逃げてテラスに着く。このあと4人がザイルをつないで登ハン。2ピッチ目もチムニーのチョックストーンを苦心して突破して、3ピッチ目は通常のジェードルで3峰にたてた。

2峰の下りは念の為、懸垂ザイルをはったが、山田、木野、澤の別れたパーティがなかなか来ず30分近く待つてやっと顔をだした。途中で道を間違えたらしい。当初は 佐々木、小椋、澤が1パーティであった。

前穂から奥穂の間では藤村、江崎のパーティが迎えにきていて合流。7人で奥穂頂上からザイテンを下った。OB隊がすでに着いていると思ったが、小1時間後に着き、牛井の材料ほかイロイロの差し入れを受け取り、豪勢な牛井にありつけた。OB 隊様 有難う！

23日 6:30出発—奥穂小屋(8:45—9:00)—9:30瀬沢岳—北穂(11:00—12:30)—14:30テント

瀬沢岳に着いたら飛騨側よりの風強く、ヤッケをきて稜線に行く。やはり縦走ルートとしては油断のならない岩稜で一般素人と思われる人達が多くいて、ヨクヤルナーと感じさせられた。天気をもっと悪化したら事故になるようなルートである。山田、藤村 OB は朝下山。

24日 6:15撤収出発—横尾(9:00—9:30)—上高地12:30

横尾小屋にデポしていた縦走用食料を受け取り、単独縦走にでる小椋君用の食料をセットし、9:30 別れる。上高地までの平坦な道では腰に重みがかかり足がでず、現役に先にゆかれてしまった。現役のこの道での元気さはみごとであり、江崎女史の足の軽さは抜群で、これまたビックリさせられた。撮影班の木野君 ご苦労さんでした。

<反省点>

1. 個人装備が重すぎた。もっと軽量化を計るべき。
2. OB がテント生活を手伝い過ぎた。食事の後始末が悪かった。
3. ザイルパーティが途中で変わってしまった。原因はザイル操作の不慣れと思われる。今回は 山田 OB の参加があつて、ようやくできた合宿で、更に天気恵まれ、次の目標へのステップにつながったと思います。

合宿を終えて

現役感想

小椋：体力の不足を感じました。多すぎたとはいえあれくらいの荷物は運べるようになっていた。あと山を眺めてたら、道の無い所を通して山頂へ登りたくなった。

江崎：今回は初めての合宿だったので、楽しみ半分、不安も半分といった感じだった。

そして、実際に始まると、あっという間に終わってしまった気がした。

今まで曇りの登山が多かった分、今回の山の上での絶景が特に印象的だった。

もっとちゃんとトレーニングをして、早く来年の合宿に行きたいと思う。

澤：なんとか無事に帰ってくることができました。今回は北穂東綾や北尾根でクライミングをするはめになり、室内の経験はあったのですが野外での経験はほとんどなかったもので、かなり緊張しました。というよりぶっちゃけ死ぬかと思いました。もう高所恐怖症がどうのという問題ではありません。高いんです。もはや真下に見える木なんざ点です。もう必死、揺れる岩なんか触っちゃった時には冷や汗ものです。死んだらどこに行くのかなあ... とか真剣に考えちゃいました。それでも雷鳥親子など下界では味わえないものをたくさん見ることができました。こんなすばらしい世界にまた行きたいと思います。(これ以上のものはご遠慮願いたいですが)

木野：毎回、合宿に行くまではあんまり乗り気じゃなくて、合宿中になると山登りがしんどくて、「何で山岳部に入ったんやろ？辞めたいなあ。」と思いつつ、山頂に着くと気分爽快で、結局合宿が終わる頃には楽しかったなあという気分だけ残っている。多分この気分はこれから参加するであろう合宿でも同じなんだと思う。結局、大学を卒業する頃には楽しい思い出ばかり残るような気もする。今回の合宿は現役部員4人参加という事もあり、これからの市大山岳部にとってとても期待の持てそうな合宿だった。特に江崎さんの活躍ぶりには目を見張るものがあり、「姉御〜!」と呼びたくなるぐらいでした。

2003年 夏の縦走

現役 小椋 剛

<笠ヶ岳―烏帽子> 9/6-9/10

九月六日から十日の山行は北アルプスの笠ヶ岳、鷲羽、水晶、野口五郎、烏帽子と縦走しました。初めの日は途中雨に降られて気分は、余り乗ってきませんでした。が、わさび平についたときにはきれいな月様が出てきました。

二日目は快晴でしたが笠新道はきつく、すっかりペースを乱してばててしまった。昼ごろから槍穂高方面が雲に覆われ、夜はテント場もすっかり雲の中で明日の天気心配になった。

三日目は雨は降らなかったものの、真っ白で何も見えず道も単調、早くテントに入りたいかった。一応三又蓮華には登った。

四日目は、昨日夕焼けの鷲羽が見ただけあってすっかりよい天気、鷲羽、水晶の大展望を楽しんで、ブロッケン現象もはじめてみて、最後は烏帽子まで行った。月と遠雷がきれいな夜だったが、何でも火星と月が大接近していたらしい。最後の日には天気が崩れかけていて、高瀬ダムに降りたときには強い雨が降ってきた。タクシーは幸い相乗りができて、大町市で風呂に入ってから電車で駒ヶ根へ行き、さらに雪線へ向かったがやっぱり

迷い、やっと着くと、藤本さん一家が来ていて腹いっぱいご馳走になった。

<塩見—農鳥—北岳—甲斐駒—千丈> 9/13—9/18

九月十三日から十八日は南アルプスを縦走、塩見、農鳥、間ノ岳、北岳、甲斐駒、千丈岳と行きました。はじめの二日間は学長、八木さん、佐々木さんをはじめとする近山会のかたがたと三伏峠で一泊して塩見岳までのぼった。

雪線をでたときはひどい雨でしたが、登山口についたときはよい天気になっていて、みんなで一緒に楽しく登りました。山頂で全員そろって一時間くらいしゃべったり飲んだりした後、たくさんの昼ごはんや餞別をもつてみんなと別れ、一人で熊の平まで歩いた。

塩見岳ではなくもってなにも見えませんでしたでしたがその後晴れて、塩見岳がよく見えました。十五日は農鳥岳を空身で往復しそれから間の岳を超え北岳山荘まで行きました。朝寒く霜柱がたっていました。山荘は水—リットル百円と安く、トイレは水洗で、人が入るとセンサーによって自動的に電気がつく建設に一千万円かかった立派な物でした。

十六日はまず空身で北岳登りました。いい天気、かなたには槍穂高連峰も見えました。ここからの下りは実に嫌で、やたらに長く何回もこけて休んでばかりいて一人でよかったと思いました。ただ単独で大荷物を運んでの登っていく女の子とすれ違ったときだけ元気が出ました。十二時ごろ登山口に着き十二時半ごろのバスに乗り北沢峠に行き、北沢長英小屋の前にテントを張って後をずっとねっころがっていました。夕方ばらばらと来て、明け方は放射冷却で寒く、目が覚めてしまいました。

十六日は空身で甲斐駒ヶ岳へ。遠くから見ても美しい山だったのと、空身という事で登るのが楽しかった。下るとき頂上直下で踏み跡を間違えてしばらくうろうろ。昼ごろ戻って後は昼寝してそのまま夜寝、なぜか暖かい夜でよく眠れた。

十七日は空身で仙丈ヶ岳へ。この日も快晴で甲斐駒、鋸岳、鳳凰三山、そしてこれから登っていく稜線を見上げるのも楽しかった。頂上で熊鷹を見たけどフィルムが切れていて写せなかった。下りてすぐテントをたたみ、北沢峠～高遠、高遠～伊那北駅までバス、伊那北駅～駒ヶ根まで電車で行きそこから雪線まで歩いた。鋸岳に登れなかったのが少し残念でした。

<中央アルプス> 9/22—9/23

九月二十二日と二十三日は雪線から中央アルプスを縦断しました。明け方雨が降ってましたがじきに止み、やがてよい天気となり木々の間から南アルプスや伊那谷がよく見えました。

一時半ごろに空木 避難小屋に着いたのですが、余りきれいでなかったし、先客もいたので空木に登ってさらに歩いて、結局南駒ヶ岳近くの摺鉢窪非難小屋で泊りました。とても景色がよいところで伊那谷のささやかな夜景が見れて、小屋には毛布も置いてあってぐっすり寝られました。

次の日はまず南駒ヶ岳に昇ってそこから倉本駅まで下山しました。天気がとてもよくて恵那山、南木曾岳、御岳など昨日見えなかった木曾谷のほうの山もよく見え、ブロッケン現象をまた見ました。道が後半悪くなってきて、笹の葉を踏んだときついというっかり滑って斜面を五メートルほど滑り落ちたり、また人通りが少ないらしく、くもの巣が体にやたらと掛かり、そして駅までもう少しのところで登山道が崩壊していて、林道を六キロほど歩かされたりしました。五時近くに降りるとすぐ電車が着てそのまま名古屋へ。

<大峰縦走> 9/26-10/1

九月二十六日から十月一日は憧れだった大峰縦走へ。またもや出発の朝、雨が降りそうな空でしたが夕方にはすっかり晴れそのまま最後まで晴れっぱなしでした。

第一日目は天川川合から狼平まで。枳尾辻あたりから急に青空になった。狼平の小屋はとてもきれいだったのですが、なぜか黒い巨大な蛾が二、三百匹もいて、夜暴れだされなにか心配でしたが何事も起こりませんでした。

二日目は弥山から天狗岳まで。弥山頂上付近の草や木が、台高の山並みが、朝日に照らされて輝き、それらの山々に今すぐにでも行きたくなりました。原生林であるためか日当たりがよくとても気持ちがよく、吹き抜ける風もなんだかいいものの様に感じました。

孔雀岳辺りで会ったおじさんが山溪の読者で、僕が書いた文章を読んでいて、またこの人は水場様子やテントのはれそうな場所を教えてくださいました。釈迦が岳はやたらと人が多くて少々うるさかったが、この先はほとんど人に会わずにすみしました。そこからまた歩いて天狗岳頂上のすぐ下でテントを張りましたが、日本アルプスのテント場と違ってとても開放感があってウキウキしてきました。

このあとも、笠捨山、大森山、七越峰の公園とテントを張りましたがとても楽しい経験でした。ただ山が低くなるにつれ、薄暗い杉林の中を道が通るようになり、なんだか陰気な気分になってきました。道は最近また整備したのか、笹の切り倒されたような形跡があちこちにあるようないい道でした。山から下りて、バスから景色を見ると彼岸花があちこちに咲いていて、金木犀もどこかかともなく匂ってきて秋をすっかり感じられました。今回の個人山行の中ではこの大峰縦走が一番楽しく、一番思い出深いものとなりました



佐々木リーダーのもと元気な新人さん

穂高に集う

定年を目の前に控えて病を知り、アルプスは病を治してからだ、とそれは真摯な一年間の闘病と、そして慶子夫人の手厚い看護の甲斐もなく癌で逝った故苑樹 寛氏を偲んで再び穂高に集いました。

昨年五月の西穂、そして今回の北穂と、彼の後生を弔う慶子夫人の思いが散骨登山の形となりました。

彼が好きだった穂高を吹き抜ける風、滝谷を吹き上げる風に彼の遺灰を流して後生を祈り、ふりかえって我が身の健康を感謝いたしました。

実施月日 2003年8月21日～24日

参加者 苑樹 慶子・山本 勝・藤本 勇・小笹 孝(L)・上堂 竹壽(SL)・久保田 淳三(食料)・長谷川 ふみ子・吉田 均・佐藤 一良・井本 陽子(佐藤友人)・大島 一恭(会計)・兵頭 渉・吉村 治代(兵頭友人)

以上13名 敬称略

穂高の思い出

そのき けいこ 記

これから秋に向かう穂高の山々を今彼は、風になって眺めていることと思います。そしてこれからもずっと季節の移り変わりを感じていってくれるのでしょうか。

3人の子ども達が未だ幼かった頃(下の子は、4才)5年程続けて毎年夏の終りに穂高に登りに行きました。初めての子に(あづみ)と名づけた時から私は、子ども達と穂高に行きたいと思っていたのです。夜中に眠ったままの子ども達を車に乗せ奈良を出発、翌朝上高地に着きその日は横尾や、前穂が美しく見える新村橋下でよくテントを張りました。疲れて歩くのがイヤになった子ども達を小屋のアイスやおおリングで釣って誤魔化しながら歩いたのですが、それにしてもよく歩いてくれました。嫌だと言っても仕方が無い事を感じ取っていたのかもしれませんが。湊沢までの登りは、私にとっても重いリュックと暑さと夏の雨と言うシンドイ思いしか残っていません。

でもテント場に着いた時の美しさと嬉しさはそれを忘れさせてくれるのに余りありました。子ども達は、岩の続く道になると俄然張り切って元気が出てきます。遊び感覚で楽しかったのでしょうか。今年も屏風岩を左に見ながら歩いている時夏草の匂いがしました。16年近く前と同じ匂いです。周りの風景と匂い、時が止まってしまった感覚でした。北穂や奥穂へは、私と2人の子どもで登り、彼は下の子とテント番でした。岩の登り降り、子どもにとってはジャングルジムに似て怖さも無く楽しいもの

だったようです。そして小学5年だった息子と彼とで登った奥穂から前穂へは、初めて男同士で登った山でザイルを結びながら何を想っていたのでしょうか。北穂から奥穂へは、私、息子、彼と3人で歩きました。初めて見る噂の滝谷は、ガスがかかってとっても神秘的に思えました。そして同時に“死“の恐怖も感じたのです。その辺を歩いていても岩壁を見ると手を掛け、足場をたしかめて登ってみる、そんな姿が子どもみたいで、余程好きなんだなあ！と思っていたのですが、彼の「岩登りが、面白い」と言う気持ちが、穂高に登って初めてなんとなく判った気がしたのです。簡単に言えるものではないのですが、又私も少しの岩の出っ張りに足を降ろしそれに自分をあづけた時、岩登りって面白い！と思えたのです。

大好きだった山の仲間の皆さんにアルプスの風にして頂いて、彼は北に南に中央にと山を充分に楽しんでいることだろうと思います。



参加メンバー。左より小笹・井本・大島・上堂・長谷川・吉田・吉村・苑樹・久保田・山本・佐藤。

おてんとさまのおかげです

上堂 竹壽 記

8月21日（木）（晴れ）

午後11時過ぎに参加者全員（23日に北穂で会う予定の兵藤君の他）ヒュッテ雪線に集まる。ビールとカレーをいただき明日の早い出発に備え就寝。

8月22日（金）（晴れ）

朝食をすませ、久保田君お手製の昼弁当をいただき、歯痛のため急遽参加できなくなった岩槻先生に後かたづけをお願いし、予定通り車三台に分乗して出発。沢渡の梓駐車場でタクシーに六名ずつ乗車して上高地へ、来年六月に新釜トンが出来る予定。前日の雨とは打って変わった晴天に恵まれ、明神、徳沢から新村橋で対岸へ渡り、今日の主役の苑樹さんの思い出の河原で昼食、しいたけのふくめ煮まで入った美味しいお弁当に皆満足。渡り返して、奥又白谷から続く前穂高の東面を見ながら横尾へ。平成11年に出来た立派な吊り橋を渡りいよいよ涸沢へ、岩小屋は水害で埋まり見る影もない。ゆるやかな登りで本谷橋まで屏風岩を左に見ながら進む。右岸へ渡り登りが始まる、木々も針葉樹から広葉樹へ変わりだんだん背も低く、涸沢の雪渓と小屋の吹き流しが見える。ここから二ピッチで涸沢ヒュッテ着。現役のテントは下に直ぐ見つかる。こちらからの合図でやっと藤村君が気づき登って来てくれる。天気が隔日毎に悪かったらしい。それでも北尾根の他予定の行動は消化したと云う。後半の縦走は小椋君の単独行になる。夕食をはさんで現役も顔をだして差し入れの品々を受け取り、これまでのエピソードをききながら歓談する。男性7名は天井桟敷の「北穂」、女性4名は隣の「大天井」、明日は「北穂」へ12名入らしい。日が沈むまで好天で穂高連峰と向かいの常念を主に表銀座の山々がよく見える。日が落ち真上に夏の大三角・ベガ（こ座）デネブ（はくちょう座）アルタイル（わし座）が現れる。下弦の月もでる。気温高く布団を掛けると暑いくらいである。

8月23日（土）（晴れ）

快晴がありがたい、パノラマコースを経由してザイテングラートへ、振り向けば常念が立派、前穂北尾根を左に白出のコルをめざす。穂高小屋のテラスでゆっくり休み景色を楽しむ。飛騨側からの風が急に強くなる。北穂へ向かう、涸沢岳の下りに始まり数回の鎖場が現れる。昔のルートと少し違っているように思う。又、滝谷側は岩登りのパーティーへの落石予防のためか一般ルートからはずされ、涸沢側にルートを取り、忠実に稜線をたどるので登り降りがおおくなり、すれ違いに時間がかかる。獅子岩を見下ろす快適な最低鞍部で昼食とする。ドームのてまえで休憩、今朝上高地から登って来る兵藤君と電話連絡で現在地を確かめると丁度北穂の南峰という。こちらドームをまいて見上げるとかれを見つける。ほぼ予定通りに合流、それにしても早い。南峰直下滝谷側への踏み跡の先に今日の散骨の儀式に相応しい場所を探す。ここなら滝谷も見渡せ、一般ルートから少し外れているし最適、皆で「お別れ」をする。北穂の頂上と小屋で先頃亡くなった宮崎君にも合掌。かなり疲れている皆と安全に涸沢まで、もうあわてなくとも良い。高度差800m南陵を下る。危険な箇所は少ないけれど疲れているのでゆっくり、涸沢小屋の少し上の美味しい

湧水で最後の休憩をして小屋へ。今日は涸沢の音楽祭、昼間から小屋の前での演奏が上までよく聞こえていた。夜7時に屋外でトランペットの演奏が一曲あり、室内楽に移る。又、今日昼過ぎ南陵で事故があり、先に降りておられた山本さんが心配されて、色々と情報を集めてくださったのを後で知る。何せいい年のパーティーなんです。慎重に。

8月24日（日）（晴れ）

天候不順の今夏に三日間も晴天に恵まれた。現役の下山を小屋の前で見送る。初めての夏山合宿の成果が荷物にぶら下がる程あふれているが、足取りは若者らしくしっかりしていたのもしい。佐々木君御苦労様。それにひきかえ……。我々も少し遅れて下山、本谷橋まで下って休憩、小笹が持って来てくれたパイ缶をあける。懐かしくも美味しい。屏風岩をとくと見て横尾から新村橋で右岸に渡って女性4名を先にやり、河童橋で再会を約す。藤本さんの先導で古い先輩の銘板を探す、河原は夏草が生い繁りなかなか見つからない。半ば諦めかけたとき兵藤君が見つけてくれる。厚さ3mm程の銅板の厚板で幅2尺高さ1尺5寸の立派な銘板である。由来は山岳会ニュースのNo.3・No.4に三島先輩が解説されている。少し時間をとってごあいさつをして、河童橋へ向かう。梓川右岸の道は工事用で人はあまり歩いてない。明神池を過ぎるとすっかり雰囲気が変わり、上高地観光のメインルートになる。五千尺ロッジ売店前で佐々木君、女性4名と再会。河童橋も人・人・人、河童にすずなりはいただきかねる。水に流してバス停へ、長い列を見てタクシーで帰る。

*山の花々は、高山植物に関するリンク集を呼び出して、各自思い出しながら探すのも楽しいものです。試してください。

北穂で想うこと そのき けいこ

山が大好きだった彼とそして私の勝手な想いに昨年の西穂、そしてこの滝谷、北穂と御一緒に下さった皆様の暖かい想いにとっても感謝し、ととても幸せに思っています。

彼は、好きな山でいられる事をもっともっと幸せに思ってくれていると思います。

そして山岳会より応援して下さった皆様有難う御座いました。

夏山合宿の新人等を見るにつけ世代を超えた仲間のスバラシさにも感動しています。

正月の燕岳撮影山行

小林 深

宮城の車止めゲートから中房温泉まで12キロ、高度差700メートルくらいの登り道で結構草臥れました。積雪10～20センチ位しかなくスノータイヤで十分走れる道なのに、通行禁止で腹立たしいことでした。

新築されたログハウス風の大浴場が大変心地よかったです。古びて薄汚れた客室には年代モノの赤外線コタツが1つあるきりで、他に暖房は何もなく寒いこと寒いこと、部屋全体が冷蔵庫のように冷え切っていました。

翌日は快晴、合戦小屋までは急坂で知られたキツイ登りでしたがトレースがしっかり付いていたので助かりました。樹林帯の中なので、樹に積もった雪が折からの強風に地吹雪のように吹きつけてきて全身雪まみれになってしまいました。

小屋からしばらく登ると樹林帯も終わり、吹き曝しの地吹雪に襲われながら2時過ぎにようやく燕山荘に到着しました。なんとか無事、冬の北アルプスに登れましたが、カメラ機材が重くて66歳の老体には限界に近いアルバイトでありました。

槍ヶ岳と大天井岳から常念岳方面の山並みが、雪煙の渦巻く彼方に輝いていました。一休みしてから撮影に出ましたが、物凄い強風になっていましたので、やむなく小屋の裏の比較的風の弱い場所からの撮影になりました。夕日に雪煙が綺麗に光っていましたが、マイナス17度の強風で何となくモタモタしてしまい、夕日がまともにカメラに入る逆光の撮影感覚が掴めないまま終わってしまいました。折角のチャンスを十分に生かせなかった感じで、欲求不満だけが残ってしまいました。

翌朝も翌々朝も快晴、東の空が真赤に焼けて赤い朝日が出てきたので、山も赤く染まるかと期待しましたが、光が弱くほとんど色付きませんでした。煤塵とか黄砂等の影響によるモヤの層に散乱されて抜けてきた光は波長の長い赤色だけになっているので、東の空は真赤なのですが光りの強度が大幅に弱まっているのです。気温が低くてダイヤモンドダストがキラキラと舞っていましたが、残念ながらこれは写真に写りません。終日、光が弱くて写真は撮れませんでした。

大晦日には山岳写真家の川井靖元氏ご夫妻が上がってこられました。山で会うのはもう4度目なのですっかり仲良くなってしまいました。お互い、75歳まで山を登り続

けようと酔った勢いで意気投合しましたが、あと8年も続けられる自信は持てませんでした。

2003年の元旦は快晴無風、下界は厚い雲海の下でありました。カメラをセットして待つうちに、地平線が金色に輝きながらもほとんど赤く染まらずに透明感のある輝きを増して行きました。続いて、強い黄金色にキラキラ輝きながら、眩しくて直視できない太陽が上がって来ました。と、周りの山々が最近見たこともないような見事な赤色に染まり始めたのです。

昨日までとまったく逆でありました。空も太陽も赤くないのに、山は真赤に染まったのです。これが、本来の山の朝の姿なのでありました。朝日が真赤になるようではダメなのでした。多分、大晦日から工場の煙も、大型トラックのディーゼル排ガスも、減ってしまったからなのでしょう。

見事なモルゲンロートにワクワクしてしまいましたが、撮影の方は思いもよらないトラブルに遭遇してメタメタでありました。この日、私は燕岳を狙うことにしてポイントを決めてカメラをセットしましたが、何故かカメラのSWをONにするとレリーズをオンにしないのに連続撮影モードになって、シャッターが暴走してしまうと言う誤動作が起きてしまったのです。原因が分からないままモタモタしている内に、今度はカメラがまったく動かなくなってしまうしました。あわてまくって予備に持ってきたもう1台を取り出して、レンズとフィルムを装填、三脚に据えた頃にはもう朝焼けは大方終わっていました。急いで何枚か撮りましたが、見事なモルゲンロートの一番良い部分は逃がしてしまいました。

諦めて槍ヶ岳方面は？と反対側を振り向くと、槍の肩にタスキ状の雲が掛り、全体を薄いガスが薄赤く色付いているのです。幻想的な光景に慌てまくってポイント移動してカメラをセットした時には、槍の穂先はもうガスに隠れていました。再びガックリのダブルパンチでありました。そんなことで、新年最初の撮影は終わってしまいました。

翌2日は、朝から地吹雪で何も見えず撮影は不能、明日から天気が崩れるとの予報でしたので朝食後すぐに下山を始めました。凄いの地吹雪でしたが、厳しいのは樹林帯に下りるまでの暫らくだけなのでドンドン下り、合戦小屋辺りで振り返りましたら稜線から雪煙が高く舞い上がっていました。

冬山は天候が不安定な上にカメラの故障が多くてなかなか上手く撮れませんが、来年こそ失敗のないように撮りたいと思って山を降りました。

(ヒュッテ「雪線」に、このとき撮った写真を展示中です)

北海道 テントの旅 (2003. 7. 23~8. 14)

堺 皓二

こんにちは。暑さに負けず元気にお越しのことと思います。小生は厳しい残暑のもと秋野菜の作業を終わったところです。1997年、道東テントの旅の後、早池峰 乳頭、白神、下北、津軽の岬を歩きその後カナディアンロッキーやイタリアにゆきました。今夏は再びテントを持って北海道にゆきました。

七月二三日、夫婦二人、車で出発し八月十五日に帰宅しました。走行距離 3975km でした。当初の計画は

「妻が学生時代、山岳部井上先輩の娘さんと二人で行って時間切れのため引き返した雨竜沼、南暑寒岳に登る。大雪山系の二、三の山と東大雪 沼の原を訪ねる。オホーツク人の遺跡に行き、サロマ、ワッカ原生花園、美瑛、富良野、旭川、札幌、小樽を経た後、 積丹半島に沿って函館に戻る」というものでした。

七月二十六日 晴れ 八雲町を出てニセコ五色温泉テント地に思ったより早く着く。足慣らしにニセコアンヌプリに登る。黄色いオトギリソウ、チシマフウロウ、シロトモエシオガマなど美しい。山頂近くエゾカンゾウが群生している。羊蹄山はガスで見えない。

七月二十七日 晴れ 京極町に入り噴き水公園の看板に釣られて行ってみる。羊蹄山の地下水脈から出る水で大勢の人が手押し車にタンクを積んで水を取りにきている。札幌西区に住む知人と久しぶりに会い、その後滝川にむかう。滝川の知人とは約四十年ぶりの再会だが会えば四十年の時間が消えるのは不思議だ。南暑寒荘まで案内を買ってくれる。暑寒ダムからはダートでほこりまみれとなって16:35南暑寒荘に着く。

七月二十八日 曇り 6:00出発 南暑寒岳までは往復18kmの道だ。遥か下に見えていた流れが山路とほぼ平行になってきて間もなく雨竜沼に着くことをうかがわせる。靴底洗いの小さな流れをじゃぶと渡り、顔を上げると視界いっぱい湿地がひろがる。7:40。緑の草、黄色いエゾカンゾウの一団、紫のヒオウギアヤメの群落、影を落とす池塘の数々其の中を静かに木道が続く。オゼコウホネ、エゾヒツジグサは睡蓮の仲間。ホソバノキソチドリ、イワイチョウ。クローズアップレンズで花を撮りつつゆっくりと歩く。10:55頂上着。増毛方面からのガスがたちまち向こうの暑寒別岳を隠す。15:20山荘帰着。レンジャーに教えられた秩父別に向かう。広い草地のテントサイト。「ちっぷ遊&ゆ」温泉にはいる。

七月二十九日 晴れ 神居古潭はアイヌの遺跡。石狩川の左岸にある。鮭が重なる様に遡行していた昔は、ここに大きな集落があった。やや上流に「たぎろう波 ましろう 白う 岩にちる神居古潭の くもれる真昼」(九条 武子)と詠まれた激流の難所がある。白い木のつり橋を渡ると明治時代の駅舎が保存されている。旭川の知人の案内でユーカラ織、雪の博物館、川村カ子トアイヌ記念館、スーパーの集まったウエスタン・

ラーメン村で昼食。ゴムハンマー、食糧、ビールなどを買い旭岳青少年テント地に入る。立派な高床式のログハウスは水洗トイレと洗面所だ。扉を開けると点灯し換気ファンがまわりだす。夕食に頭と腸をとりぶつ切りにしてもらったホッケを煮付けたらとても美味しかった。知人の奥さんが「千葉から姉が来るといつも生ホッケの煮付けを食べたいというのよ」と勧めてくれたのだ。

七月三十日 雨 浸水のためテントを移動し、美瑛の丘に遊びに行く。七月三十一日 雨 晴れ地域の網走方面へ移動する。網走の北方民族博物館はオホーツク人やアイヌ文化関連の資料館として最も充実していると思った。網走湖呼人浜テント地に泊る。石北本線夜行列車の音は情緒があるが国道39号の車の音はうるさい。網走湖名物、夕日の沈む湖面がよかった。

八月一日 晴れ 網走川河口のモヨロ貝塚遺跡は今も発掘していた。能取岬の馬たちは断崖の上の草地で風に吹かれていた。能取湖のサンゴ草群落は一面に赤く色付きはじめていた。ワッカ原生花園の代表は華やかなハマナス。ハマエンドウ、ムシャリンドウ、ツルフジ、カラフトニンジン、アキカラマツ、マツヨイグサ、ノコギリソウ。層雲峡に戻る、16:00。

八月二日 曇り 黒岳をめざす。ロープウェイ山上駅6:40。急だがよく整備された登山道に黄色いウコンウツギ、トリカブト、ミヤマアキノキリンソウ、キンボウゲが夫々群生している。黒岳9:00。お鉢展望台辺りから雨風が強くなる。引き返す人も居るが登ることにする。12:00頂上につき岩陰で休む間もなく風雨やんで晴れ間が見えてきた。来て良かったと思う。コマクサは黒岳石室からお鉢展望台の間に多いが大量の表土がコマクサ諸共赤石川に向かって崩落している。融雪だろうか。これを止めるには蛇かごしかないと思う。17:00テントに戻りコインランドリーを使いつつテントをたたみ九日ぶりにホテルに泊る。

八月三日 雨 沼の原、三笠新道付近にヒグマが出ている。計画を変更し旭川を経て旭岳テント地に向かう。旭川駅前の歩行者天国、平和通りを歩いてみるが雨のため気分が乗らない。店も個性的なものは少なく、大型チェーン店が目立って旭川の匂いがしない。三浦綾子記念文学館に行く。外国種見本林の中にあり、小さいが静かで落ち着けるのが良い。取材旅行のエピソード、カメラ、書斎と椅子、講演会のテーブルも聞けてよい。食料、ビールなど買い旭岳テント地17:00、又帰ってきたよ、井上靖に似た管理人とは馴染みである。

八月四日 曇り 6:10発 旭岳に向かう。ガスが残っているが晴れるはずである。姿見駅6:50、登るにつれ強い西風が斜め後ろから吹く。左手に噴煙の上がる火口跡を見下ろしてぐんぐんとひと登り頑張ると広い頂上に着いた、8:50。右にトムラウシの山塊、東に北嶺岳、北海岳、白雲岳、ぎざぎざしたのが黒岳。風冷たくシャッターがおちない。裏旭の大きいコルは無風、雪解け水はあるがトイレはない。のんびりと日差しの中

を間宮岳、中岳分岐、と過ぎる。中岳温泉に下る平たい尾根の斜面にウサギギクが一面に咲き北嶺岳カールのがら場に続いている。イワブクロの咲く尾根の中ほどで急降下し小さな流れに着く。流れの中の湯溜りが中岳温泉、十人位は入れるかな。熊ヶ岳の裾で妻が獣臭いと言う。ヒグマの活動地域である。お花畑の木道でやすみテルモスの紅茶で軽く食べる。小さな流れをよぎる度に岸边にはエゾコザクラの群落が広がっている。裾合せ平、夫婦池を通り、姿見の池へ元に戻る。テント15:30。

八月五日 晴れ 十勝の吹上げテント地に向かう。旭川空港近くのスーパーホクレンで買い物をする。美瑛の白金インフォメーションセンターは疎林に囲まれた芝生の中にあり周囲の景観を引き立てている。

「この木造建物の設計は北海道東海大学」とセンターの職員が教えてくれた。望岳台から十勝岳を見る。見渡す限り赤茶けた岩と火山礫が上まで続いて荒々しい。噴煙を出し旭岳と同じ山肌をしている。高山植物の多い富良野岳に登ることにする。吹上げテント地は乾いた芝の台地、13:40。吹上げ白銀荘の湯は総ひば造りの天然温泉、何に効くか忘れたが効能あらたからしい。ここは十勝岳への最短コースで4時間位でいけると思う。

八月六日 晴れ 富良野岳—上富良野岳 十勝温泉駐車場6:00富良野岳8:50道は左に緩やかに登り安政火口の潤谷に下る。ここから登りとなり稜線にでると、富良野岳の頭が聳え立つ。上富良野岳からの眺めは上ホロカメットク山、大砲岩が荒々しい。駐車場15:30、ペンション、フラヌイにゆく。

富良野物産館で買った地元ワインでまず乾杯、美味しいワインだ。夕食は紅鮭のマリネ、レタスサラダ、鯛ホイル焼き、牛ステーキ、ライス、アイスクリーム、ミントティ、朝、サラダ、ハム、ソーセージ、コーヒ紅茶ジュース、パンの食事で満足した。ただ中国人観光客の一群は騒がしかった。

八月七日 晴れ 富良野より札幌に向かう。途中花壇の美しい日の出公園による。丘の上が赤黄紫などのパッチワークで彩られて居る。ラベンダーは少し時期が遅い。千望峠から砂利道に苦しみ芦別、赤平、滝川をへて江別森林公園に着く。ここは見つけるのに苦労した。台風10号接近、夜雨。

八月八日 雨 開拓100年記念塔の上は霧の中、札幌に着き、旧道庁。大通り公園は野外ビアガーデンになっていて雨の中パイプ椅子だけが並んでいる。

小樽へ向かう。小樽運河や倉庫群はイメージ通りで、内部は大きい木組み、高い天井を生かした工夫があり、木の良さがある。運河倉庫食堂という店で昼を食べる。テーブル毎に炭火があり、えび、るいべ、いかの刺身、ほっけ、ほたて、ほっきがいは自分で焼く。意外に熱くないが青い煙が頭の上の高い所に淀んでいる。街には飾り庇、飾り窓台の大正期の建物が保存されホテルになったり、ガラス工芸館になったりしている。国立の知人に教わったコーヒ店十一夜で一息いれる。器は近郊の陶芸家から取り寄せている。車で欄島に向かうと同時に土砂ぶりとなる。

八月九日 曇り 台風情報より北海道太平洋側は昼過ぎから風雨強まる、台風は午後六

時ごろ仙台付近を通ると見当をつける。宿に積丹半島への道路状況をきく。古平トンネル事故以来、道は良くなり危険箇所はなくなった。しかし、景色のいい所はトンネルになってしまったという。

島武意岬の駐車場から低く狭く暗いトンネルを抜けると岬だ。絶景の荒磯も乳色の霧の中に灰色に沈んでいる。下り口のマムシ注意の立て札と、この霧、視界悪く蛇の識別もままならぬため下りるのをやめる。神威岬には海面上50m位の狭い岩稜上に作られた柵に囲われた道をゆく。ところどころに足場板の橋もあり階段もある。頭上近くウミネコがとぶ。両岸の海岸より切り立った崖は緑の苔がびっしりとついている。半島先端に二十人くらいは乗れる広場がある。岬から見下ろすと10m位の岩がたち順次低くなり沖に伸びつつ波に沈む。駐車場にキタキツネのこどもがうろちょろしたり寝そべったりして車の発進に気を使う。キタキツネは十勝温泉近くの道にも出てきて、車から食べ物をもらっていた。慣らすと轢かれる心配がある。五色温泉テント地にもでてきた。犬かと思ったが後で狐とわかった。神威岬の親狐はたちまち姿を隠した。泊村で鯨御殿をみる。

漁獲につぐ乱獲のすえ鯨は絶滅した。目の前に広がる海から、いまや鯨は一匹も獲れない。この立派な建物はその愚かさを象徴するだけだ。岩内で食べた握り寿司はおいしかった。久しぶりに、しゃりがよかった。雷電海岸を走り樽岸より内陸の黒松内町にはいる。雨つよくなる。黒松内駅前旅館に泊る。創業1870年という、安く心のこもった宿だった。

八月十日 雨 朝六時台風は宗谷から千島にぬけた。長万部に出て内浦湾沿いに南下し、再び日本海側にでる。途中で、妻が丘の上の牧場で馬のスケッチをしていると男の子が見にきた。一年生で、学校には自転車で行くという。近くだよ、というのがここからはみえない。写真を取り住所をきいて送ると、しばらくしてその子の母親から返事がきた。北檜山町にはいる。人の少ない町で蕎麦屋が一軒、和菓子屋が一軒、電気屋が一軒のほかこれといった店は目に付かないがらんとした街。三本杉岩を見て熊石の青少年旅行村でテント泊まり。夜、雨。

八月十一日 雨 10時ごろからやむ。江差市に行く。360年続いている祭りの日で各町内の山車(だし)12台ほどが勢ぞろいして出て行くのを見る。江差追分を聞いたり、鹿踊りを見たりして過ごす。北海道のキャンプ最終地大沼公園15:25着。

八月十二日 晴れ 函館には七飯岳の肩を通り、七飯町から国道5を行く。道の入り口を農婦に問うと、牧場の牛馬を狙って出る熊の話、「出合えば全速力で駆け抜けろ」、幸い熊には遭わず函館を見下ろす眺めに満足して市にはいる。五稜郭タワー、西波止場という大きい木造建物、煉瓦倉庫群、土産物屋、ガラス工芸館、函館公会堂、ハリストス教会といろいろみて歩く。この街は通りも広くてからりと明るい。広い割りには樹木も多い。高台の公会堂や教会から港が見下ろせる。ハイカラなところがいい。ガラス工芸品も小樽と比べお洒落なものが多い。函館山からは二つの海に挟まれた街の形が良くわかる。見ていると街の上に虹がでた。今夜はのんびりと湯の川温泉に泊れる。明日は函館朝市を見て、本土に向かって出港だ。

おわり

ニュージーランドの山旅

藤本 勇

80歳を越えた義母を連れて2000年は南島、2001年は北島をレンタカーを使って、それぞれ1ヶ月ニュージーランドの隅々まで走り回った。2年続きの旅で、すっかりニュージーランドの魅力の虜となってしまった。あれほど元気だった義母が2001年の秋に「葉っぱのフレデー」のように逝ってしまった。彼女と一緒に時は山を見ても山に入らず、ただ遠くから眺めているだけであった。ニュージーランドの各地を歩いていると深緑色のベースに黄色の文字のDOCの案内標識がある。一度は、この標識のもとを寝袋と食料を担いで歩いて見たかった。

ニュージーランドではトレッキングのことを、トラッピングと呼ぶ。頂上を目指す“登山”とは違い、歩くプロセスを楽しむスポーツだ。よく整備されたコースが全国にあるのが、何よりうれしい。

ニュージーランドのトラッピングコースを歩いたり、山小屋に泊まってみると、文字通り老若男女、世界各国の人々がこのスポーツを楽しんでいる。10代の若いグループ、子連れファミリー、私達のような白髪の老夫婦、海外からの旅行者も多い。日本的な山登りの感覚からすれば、頂上にあまりこだわることなく進むニュージーランドのトラッピングルートに違和感を覚えたこともあったが、実際にこの国のあちこちを歩くに連れてトラッピングとは変化に富んだニュージーランドの自然風景を堪能するのに理想的なスポーツである。

トラッピングがニュージーランドの国民的スポーツであることを感じさせる、もうひとつの理由としてDOC(ドック)と通称される公的機関の存在が大きい。DOCとはDepartment Of Conservationの略で「環境保護省」とでも訳すことが出来る。日本の「環境省」にあたる。国内のおもなトラッピングのコースは殆どすべてDOCによって整備されているといっているほどだ。

ここでいう“整備”とは、決して大きな設備を造ったりすることではない。必要なところに橋をかけたり、水はけの悪い山道に排水溝を掘ったり、泥道に木道を設けたり、滑りやすい個所にはステップを、といった自然の景観を損なわない範囲で手を加えるやり方だ。山道を歩いていると、道の整備の仕方が実にうまく、感心させられることが多い。DOCのスタッフがアウトドアでの遊び方を熟知していることが伝わってくる。

トラッピングコースはDOCが推奨している「グレート・ウオーク Great Walks」が有名である。

- 1.レイク・ワイカレモアナ・トラック(北島)
- 2.トンガリロ・クロッシング(北島)
- 3.エイベル・タスマン海岸線トラック(南島)
- 4.ヒーフィー・トラック(南島)
- 5.ルートバン・トラック(南島)
- 6.ミルフオード・トラック(南島)
- 7.ケプラー・トラック(南島)

8. ラキウラ・トラック(南島の最南端のステュワート島)

人気度・知名度の高いのは、やはり“世界で一番美しい…”などと枕詞のついたミルフォード・トラックです。夏のシーズン(10-4月)は定員制がひかれ、決まった行程で歩かねばならない。クリスマスから新年にかけては半年前から予約を入れねばならない。

ミルフォードの多くが「森」歩きであるのに対して、ルートバン・トラックは「山」歩きだ。コースの取り方も自由で景観も変化に富んでいる。

次に人気の高いのが、エイベル・タスマン海岸線トラックである。ルートの多くは海岸の水辺を行くが、部分的にはポートの便もあるため、往路はトラッピング、復路はポート(又はその逆)といった手軽なプランを組むことも出来る。

トラッピングの情報源として最も利用するのは各地にあるDOCの事務所だ。ここでは小屋の利用券(Hut Pass)の販売、地図やパンフレットの販売を行っている。グレート・ウォークを歩くときはDOCで売っている1ドルの案内書の地図で十分である。それほどコースの整備が行き届いている。DOCのホームページでは、主要なトラッピングの情報やHutの予約も出来る。URL <http://www.doc.govt.nz/> (英語版)で

explore > Tracks and Walks > Great Walks とクリックすれば貴重な情報が得られる。

私達夫婦は2003年2月2日から4月30日までニュージーランドで暮らした。その間に最南端のステュワート島のラキウラ・トラックを2月8日から10日まで歩き、次にルートバン・トラックを2月13日から16日にかけて歩いた。日本の若い娘さんとオークランドの南にあるハミルトンという町のフラットの一室で1ヶ月ほど暮らした。その間にエイベル・タスマン海岸線トラックを3月30日から4月2日まで歩いた。一番、山らしいルートバン・トラックの手記を女房の光子が書いたもので、それを紹介する。

2月13日 朝、銀行で両替をすませ、最低限必要な物のみをパッキングして、クイズタウンからグレノキーに向かう。よく晴れたワカティブ湖が光る。ルートバーンシェルターで靴ヒモをしめ直し、いよいよ歩く。

すき通った流れに沿ったなだらかな樹林帯の道が続く。DOCのお姉さんが道の補修をしていた。みとれるような長い脚。4人組みのイギリス人は植物が好きらしく、しょっちゅう立ち止まるので、足の遅い私よりもかなり遅れている。2時間ほどでフラット小屋に着く。ガス、水OKで心丈夫。夕食はスモークサーモンとレタス、すまし汁、白飯。のりまきを作っていると皆不思議そうに見るので、オランダ人の男の子にあげると彼はオランダでよく寿司を食べているらしく、とっても喜んだ。

遅くに着いたので2段ベッドの上しかあいてなくて横になったものの、どうにも落着かない。マットレスをひきづり降りしてリビングで広々と眠る。

夜中、ものすごい雨。でも朝はカラリと晴れ上がった。対岸のNorth Branchは増水のため渡れずに断念。小屋の前はブラックベリーの群生地。鈴なりのベリーをあきずに食べる。おいしい。

フォールズ小屋には1時間半で到着。着いたとたんに関が降り出し本当に私たちはラッキーだった。あとで続々と来る人達は皆ズブぬれ。DOCのお兄さんはすごいきれいずきで、立派な小屋はトイレもキッチンもピカピカ。

ストーブで日本から持参した餅を焼きおすそわけ。“醤油があればもっとおいしんだけど”と言っ

たら”ぼく持ってる”とすぐお皿と一緒に持ってきてくれた。やっぱり日本の餅はすぐれもの。自分で焼いたと言う暖かいマフィンにブルーベリージャムまでそえて持ってきてくれた。

昨日から一緒にイギリス人達ともビスケットや何かの交換。ダンナはキャプテンで日本の江田島や横浜に行ったとか。なかなかステキなおじさん。昨夜はNZのおばさんが日本の教育について色々尋ねてくるので、教育とあんまり縁のない私は大変返事に困りました。その点 DOC のお兄さんはむずかしいことは何も言わず、いきなりお餅とマフィンの交換。快適な小屋で夜もぐっすり眠る。明け方、この小屋も満天の星。天の川もはっきり見える。

翌朝もすばらしい天気。雨で増水した滝を横に見てぐんぐん登ってゆく。ルートバン川の源流は小さな池がいっぱいあり湿地地帯。源流のハリス湖はけっこう大きくて美しい。ハリス湖を下に見るようになると、まもなくサドル。ここで荷物を置いてコニカルヒルに登る。1時間ほど登ると360度の展望の丘に着く。真っ白に雪をかぶったピークが全て見渡せる。ゆっくり展望を楽しんだ後サドルまで下る。

ここで暖かい Tea を作り、サンドイッチのランチ。昨夜作っておいたのがおいしかった。午後は山腹沿いのすばらしい道、時々小さな沢が流れ込み、そこでは必ず水を飲んで休憩。おいしい水だ。ダンナは”至福の時だあー”とご満足のごようす。

こんなにいい天気に恵まれ本当にラッキー。まもなくマッケンジー湖が下に見えてくる。今夜の小屋だ。美しい湖のすぐそばに DOC の小屋が建っている。湖のそばでは皆、裸足で読書、ヨーガとのんびり静か。そこへダンナが大きな声で”光子、静かでええとこやなあー” ”しー。”本当に困ります。

翌朝、ホーデン小屋まではたいした登りもなく3時間で到着。ランチの後で自動車道のデバイドへ。出発前、無事荷物を担いで歩けるだろうか？とちょっと不安だったが、何とか完走。

1時間遅れでいつものイギリス人グループが到着。皆で喜び合う。うちのダンナはえらい気をきかせて”マダム アフタヌーンティー”とやっている。キャプテン夫妻は”イギリスに来たら是非よってくれ。古いけど大きな家だから何日でも泊まってくれ”と言ってくれたので、私も”古くて小さな家だけれど、何日でも泊まって下さい”と答えた。来年の春にはイギリスに行ってみようかな？

Indipendent Walkなんてかつこよく聞こえるけど、要するにお金のない人は自分の寝具、食べ物を持って歩け、ということ。あー、一度ガイドド ツアーに参加させてほしいな。しかしルートバーンの道はお金持ちにも貧乏人にも平等に大きな感動を与えてくれる。すばらしいトラックでありました。ニュージーランドに感謝。

今年の年末にはニュージーランド人もほとんど行ったことのないスチュワート島のラキウラ・トラックを光子が再度挑戦したいと申している。前回は予約が出来なかった”世界一美しいといわれているミルフォード・トラック”も歩く計画を立てている。また、ニュージーランドの富士山とも言われているタラナキ山にも登る予定だ。

引っ張り上げられてヴェッターホルン

小笹 孝

ヴェッターホルンは、標高こそ 3,701m と 4,000m 峰には遥かに届きませんが、グリーンデルワルトの町から眺められる山々のなかで「たった一人の山」(浦松佐美太郎 著)の舞台として多くの日本人が親しく感じる山の一つです。その山容は、どっしりとして重厚でしかも均整の取れたものであり、鋭利な刃物のような東山稜を従えたアイガーと併せてグリーンデルワルトの景観を代表するものと言えましょう。

そのようなヴェッターホルンにいつか登りたいものとかねがね想っていました。定年退職とともに再開した山登りですが、思い返せば2シーズン目が最も調子よく登れたように思います。ミッテルレギでは、固定ザイルを掴んで登れと言うWalterの指示を聞き流しながら登攀を楽しみ、下山してきたメンヒスヨッホの小屋で、彼がガイド手帳の一ページに日本の文字での書き込みを求めてくれたことは実に愉快的思い出です。

続いて訪れたガーベルホルンでは、雪の状態がスティッキーで悪く、風も強いから、と言うガイドの判断でヴェレンクッペから引き返す結果で終わりましたが、靴底がダンゴになる湿った雪には慣れていることだし、あと160mぐらい高くなっても、今吹いている風と大して変わるものではあるまいに、と随分と不足に思いながらも、ガイドが危険だと断ずればそれに従うしかなく、未練たらたら諦めたものでした。

しかしそれ以降は膝が段々と悪くなってきたようで、痛みを感じてくるにつれて無意識のうちに全身に力がいり、強ばりっぱなしの筋肉がスタミナの消耗を加速させるような事が増えてきました。今夏あたりぼちぼち年貢の納め時かも知れんなー。来夏になればヴェッターホルンも怪しいぞー。自信を失ない、焦りと不安とが糺い交じった不安定な気持ちで、七年目の夏も独りで兎も角出掛けて行きました。

結果は実に不細工な仕儀で、ガイドに引っ張られた事ばかりが強く記憶に残っています。彼等が客を強引に引っ張って登って行く事があると話には聞いてはいましたが、それが自分の現実となった時は何とも嫌なものでした。若いガイド、ステファンにゴリゴリ引っ張られたのが口惜しく、癪でなりません。氷河を歩いていた時ではなくて、岩場になってから引っ張り始めたものですから尚更でした。

しかし、これもきっと彼流の親切心の表れだったのかも知れません。前日、夕景を楽しみながら食後の一刻をステファンと過ごした際に、一昨年のシュレックホルンに懲りて言わずもがなの事を言ってしまうていたからです。俺の歩く速度は早くはないが必ずついて行けるから、絶対に途中で引返すのは嫌だ！ とガイド料惜しさの予防線を張った私に、真面目なセミベジタリアンが忠実に応えてくれた結果なのでしょう。

絶対に頂上まで連れて行くから動けヨ！ 三日もかかって登るのとチャウ！ 一日しかないんや！ と言いながら遮二無二引っ張ります。そんなことをされると反って登り難いものですから、引っ張るな！ と怒鳴れば、早く登れ！ と頭の上から返ってくる始末。

疲れてくると上方を振り仰ぐ動作を殆どしなくなり、ただじっと下を向いて右左と両手両足を動かしている状態でした。そうすると手を使わなくても済むような傾斜になってもヨツンバイ状態の儘に不思議となってしまうものです。すると今度は、手を挙げろ！ 脚だけで登れ！ と、実に細部にわたる叱咤激励が飛び込んできますから、思わず以前に出遭った光景を思い出して苦笑していました。それは、同じく2年目に初めてのメンヒから雪稜を独り下ってきた直後に出合った情景ですが、時差ボケの影響もあってか若者が容易な岩稜で随分とヨツンバイ状態でした。その若者のガイドが、同じ日本人の私を見てにやりと笑うのが、己のヤスっぽい優越心を刺激して慌てたことでした。

クレペリン検査のカーブでは有りませんが、頂上も近くなってきて先行パーティーが下りてくるのに出会うと、不思議に身体が軽くなり最後のガンバリが出てくるものですから

私も性格は普通の範疇なのでしょう。ステファンは引張り疲れが出て来たのか牽引力が弱まって随分と登り易くなりました。

2003年7月19日9時00分。頂上に立つ気分は格別で、引っ張られた事も忘れます。

ヴェッターホルンが大きな影を目の下、グリンデルワルトの翠に落とていました。風の冷たさに慌ててヤッケを着込みながらベルニーズの遠く近くを目に焼き付けました。最も目立って見えたのがシュレックホルンだったのはチョット癪でしたが、ほぼ同高度のミッテルレギを頂上まで辿りながらじっと見ていると、嬉しさのなかに寂しさがチョッピリ紛れ込んで消えてゆきました。

☆メモ

- ・標高差 バス停〜グレックシュタイン小屋 870m (2317-1450=867)
グレックシュタイン小屋〜頂上 1380m (3701-2317=1384)
- ・かなりの標高差があるため、朝食開始時刻は3時。
- ・「ベルナー・オーバーラント」(監修ガストン・レビュファ ハンス・グロッセン著 近藤 等訳)に依れば南西面一般ルートの所要時間は、良いコンディションで登り5時間、下降4時間となっています。
- ・今夏のヨーロッパ、6月から熱波が襲い、暑く、水不足の夏。山も残雪が極端に少ないうえに雪線が高く、町で雨が降った後もアイガー頂上付近が白くなっていない事が何回も。岩の部分が長いヴェッターホルンの場合は絶好のコンディションであった筈です。
- ・ガイド料 SFr 990/一人 二人の場合は左記の約2割増し。
2食付き小屋代を含み、ガイド事務所に前払いする事がツエルマットとは異なります。
- ・ルートの詳細は残念ながら記憶に残っていません。大雑把な印象を記します。
- ・小屋から暫くの間はハイキング道があり、ついで明瞭な踏み跡を辿り、(朝は暗くて判然としなかったが下山時に判ったこと。)かなり明るくなってクリンネン氷河に出ました。
- ・この氷河はクレバスも殆ど無く、日本の山の雪渓のような感じでした。
- ・右上して、氷河に長く延びてきている側稜に取り付きました。そしてほぼリッジを北東方向に直上しては浅いガリーを隔てた右側の稜へと二回程乗り移って暫くするとヴェッターザッテルに出ました。
- ・何れも稜は堅岩部が少なく、脆くかつ浮き石が多いが、傾斜がそれ程無いため容易。
- ・ザッテルから頂上へは急な雪壁経由で直接行けると見えたましたが、我々は雪壁左端の岩場にルートを取り、北西方向に登って頂上の左肩に出ました。
- ・下降ルートは登りと全く同じで、全てクライミングダウンでしたが、側稜で一カ所4m程をトップロープで降ろして貰いました。

余談

- ・ザッテルから上部の岩場には、確保支点的鉄棒が要所要所に何カ所か有りましたが、ザッテルから下部の側稜部では一本しか気が付きませんでした。
- ・下山時、ザッテルから下部で、一本右隣の稜に登ってくる後発組に出会いました。
- ・これらの事からザッテル迄の側稜部でルートの自由度は大きいようです。
- ・暗いうちに歩く部分の見当を前日につけておけば、我々クラスでも仲間内でガイドレス登山を楽しめると思います。
- ・今回の所要時間 登り5時間30分 頂上滞在10分 下り3時間20分
(ステファンがヤイノやいの言うほど遅くは無かったと思ってますねんや。)

以上

アイランドピーク登頂 (6189M)

ー楽しかった高度順化への旅ー (9/23-10/20)

佐々木惣四郎

<アイランドピークへの道>

‘99年アコンカグアより高度順化に失敗して目がみえなくなり6800Mで撤退を余儀なくされて以来の6000M峰へのチャレンジである。アイランドピークは、エベレストを盟主とするクーンブ山群のローツエシャール(8400M)南稜末端に位置し、まわりを氷河に取り囲まれている。

クーンブの中心地ナムチェバザールから北東25キロの位置で登山口は、ドウド、コシ川最奥の集落チュクン(4730M)で、エベレスト街道の玄関ロルクラ(2840M)から実動5日目であるが8日目の到着となった。

チュクンより半日にあたるBC(5087M)に入り、ハイキャンプ(5640M)より10月6日にアタック(11日目)した。5日夜11時に起床、6日朝1時に出発。メンバーは労山ポップの杉山、橋本(女性)、土谷(女性)と小生及びシェルパ2名であったが、土谷さんの体調すぐれず約1時間後シェルパとHCに下山した。

雪線の5800Mまで約2ピッチで天気は良く3時迄はマイナス15度、その後マイナス10度の冷え込みで岩棚が続いた。ここでアイゼンをつけ3人コンテとなり雪田をゆき頂上直下の雪田に6時頃着いた。すでにFIXロープが残されており、ユマールを利用して100M程で稜線に出、さらに100M進み、次の100M FIXロープをゆき7時25分頂上につく。最大傾斜は約50度であった。

正面にローツエ南壁、ローツエシャール南壁、ヌブツエの稜線があり、マカルー、アマダブラム、メラピーク等が近くにあり、累々と高峰が連なり、壮大なパノラマが展開した。天気も良く、高度の影響もほとんど無く存分に満喫したが、帰路FIXのエイト環での下降 約250Mには疲れた。

<キャラバンメモ>

往路は、十分にモンスーンが明けてなかった為か、雨模様が続き9月26日ルクラに着き、山が見え始めたのは10月1日デボチェをでてアマダブラムを望んだ時であった。その後、ローツエが見え、3日最奥のチュクンに入り、翌日BCに入ったが、両側の景色がアコンカグアのBC入りに似ていて感無量であった。それにエーデルバイスが咲き乱れており、嬉しくて仕方なかった。

<榊原氏の事故に接し行先を変更>

7日デンボチエに戻り、労山の榊原、宮本両氏が事故にあった情報がシェルパにより伝えられ行き先をカラパタルから目指されていたチョルツエ(6400M)BCへ、労山の杉山さんとトウクラを経由して入った。BCに着いたら、ヘリにて入られた林さんと会い、状況を確認していたら、再度現場に入っていた宮本氏と連絡がとれ、榊原さんの死亡が確認された。現場状況の確認結果、折からの天候悪化による雪、及び現場までのテクニカルな困難さから、遺体は現場に残す事となり、宮本氏はHCより下山し、シェルパに

て HC の撤収がされた。

榊原さんはプモリを始めとし、リルン南東線の登頂も試みられたベテランであったが、事故原因は、山の岩自体のとてつもない大崩壊であった。飄々とした人柄が偲ばれ、誠に惜しいクライマーであった。

< シェルパ、コック、ポーターとの生活、交流 >

今回忘れる事ができないのは、朝、昼、晩の食事が、量といい、質といい、行き届いていた事で食べさせられたと錯覚するほど満足のゆくものであった。また、39年前のリルン行きと比べ、シェルパ等との会話は延々と続き、若い人にはそれなりにより意義あるものになると感じさせられた。

トレッキングの形式としてロッジ泊まりでガイド、ポーターを利用する方法を西洋人が多くとっていたが、長旅の場合、コック、テントを利用し、料理を作ってもらうのが、楽しい旅の条件と思われる。

< 次に向けて。。。 >

京都仏教大学4年生の3人パーティは、アイント・ピーク BC よりガイドの力を借りずに、自分たちだけで HC をあげ登頂に成功していた。学生時代のメモリーとしての旅で25日間 約20万での計画であった。これまで週2回のランニングを中心としたトレーニングで同好会との事。

エベレスト街道は、華やかな展望で学生には、そぐわない気もするが、山になじみ6000M 峰に登れば、今後に大きな貯金となるように思う。

今回カラパタール、ゴーキョのいずれへも行けなかったが、再度仲間とあるいは現役と一緒に訪れてみたいと思っている。それにしても高度順応に問題が出なかった事で、次への希望ができた山行であった。

リルンの穂先を眺めつつ

カトマンドゥにも秋がきて、事務所のテラスからも、ランタンリルンのピークが少しだけ、見える季節になりました。

仕事で疲れた目を休めるためにテラスに出ると、ポプラの木の横から、真っ白のリルンの穂先が見えます。

あの頂上を見る度に、森本隊長や、大島健司さんのことが胸を掠めます。昨年4月、JICA のシニア・ボランティアとして、ネパールに赴任する時には、これで、ランタンの墓参りにいけるなと思ったものでした。

しかし、それが甘い希望にすぎないことを、すぐに思い知らされました。

つまり、ランタン谷の入口は、マオイストの部落があり、公用で来ているシニア・ボランティアの私は、休暇であれ、出張であれ、立ち入れない地域であった訳です。

今年の春、広谷さんらの一行がリルンの墓参りに来られたのは、皆様ご存知のとおりです。この時は、ヘリコプターで、いきなりキャンジン・ゴンパまでヘリで上がるとのことで、これなら、参加は OK だと思い、JICA 事務局へ旅行の申請をしました。勿論、先輩の墓参りであることも添え書きしていました。

しかし、事務局の判断は厳しく、結果は NO でした。何で…。という気持ちになりましたが、JICA のルールに従わざるを得ません。残念な気持ちで、広谷さん一行をお見送りし

たものでした。

すぐそこにあるのに、行きたくても行けない。この切ないモヤモヤは、精神衛生上悪いものです。

そこで、ランタン谷がダメなら、エベレスト街道は？アンナプルナ方面なら？といろいろ想いを馳せましたが、休暇日数が足りず、結局、昨年も行ったことがあるムスタンのジョムソン訪れることにしました。ここは、ヒマラヤを北側から眺められるところです。これには、今年4月から同居している妻の希望も入れたものでした。

ネパールには、秋にダサインという大きな祭りがあり、ほぼ1週間、政府も民間の事務所、商店も休みになります。それを利用しての旅でした。

9月30日カトマンドゥからポカラに飛び、翌日早朝にジョムソンに飛びました。白雪を被ったアンナプルナ連峰をかすめるように通過して、20分のフライトでした。

ここまで来れば、マオイストもない世界で、西欧のトレッカー達ものんびりと歩いています。2,900メートルに建つ5ツ星のデラックスホテル、ジョムソン・マウンテン・リゾートに3泊してきました。

ホテルの大きな窓からビールを飲みながら眺めるニルギリ(約7,000m)のヒマラヤ壁は、陽の光に照らされ、圧倒される大きさでした。

ジョムソンから3,900m地点にあるムクチナートへ馬に乗り、日帰り旅行を楽しむのが、今回の目的です。歩いていくと、1泊2日のトレッキングになるので、四つ足の馬に身を任せることにしました。

朝、6:30に出発し、チベット高原から流れるカリガンダキの流れに沿って、河原を歩き始めました。こちらで、馬に乗るのは3度目で、手綱捌きもうくなりました。アラブ系の馬と違って、少し小柄でおとなしいので、楽なものです。

アパームスタンとの境界線のカグベニの近く、エクラバッティから坂道になり、馬はドンドン高度を稼いでいきます。チベット高原につながる峰峰を眺めつつ登っていくのは、気持ちのいいものです。振り返ると、ダウラギリのピークも見えます。

お昼過ぎに、ヒンズー教と、チベット仏教の聖地であるムクチナート寺院に到着。ヒンズー教徒は、生涯に一度は訪れたいという聖地の境内を一回りして、近くの小屋で遅い昼食。ビールもうまかったですね。

下りは、早いのですが、余りにも急な下りは、馬から下りて歩きました。

カリガンダキに沿ったトレッキングルートで、ここから落ちれば一巻の終わりだなあという地点を何度も通過しました。

出発地のジョムソンに戻った時には、日も暮れて、間もなく通行止めになる時間帯でした。

夜間は、軍と警察が警備をしており、トレッカーも地元の人でも通行できなくなるのです。

ホテルに帰り、馬には、りんごのチップを、また、世話になった馬方には、ルピーをたくさん弾んでお礼としました。

こんなスボラな旅をしていると、本格的なトレッキングはできなくなりますね。

私の任期もあと、5ヶ月余りになりましたが、ヒマラヤの山麓をのんびり歩くには、やはり、個人の身でもう一度出直す以外に、望みはなさそうです。そのころには、政府とマオイストの争いも終わっていることでしょう。

ランタンリルンの穂先をながめつつ、せつない想いでしたためました。

北海のかなた南洋の果て

和田 城志

去年の夏、ヨットを経験した。そして、初めてヨーロッパの土を踏み、ノルウェーを旅した。今年は、念願のヨットを手に入れた。SK31、中古のボロ船だが、銘艇の誉れ高い、頑丈なセーリングクルーザーである。神奈川県油壺から泉州二色ハーバーまで四日かけて回航してきた。まだ夢の域からは脱していないが、山から海へ転身しようかと思っている。そう思い立ったのは、土佐の海べり育ちで潮の香りが恋しくなったのが第一の理由であるが、ハロルド・W・ティルマン(1898～1977)の伝記「高い山、遙かな海」を再読して、以前とは違った感動を得たことも大きく作用している。山馬鹿の役得か、世事には疎いが法螺話にはことかかない。

指標はティルマン

ティルマンは市大山岳会にかすかな関係がある。彼による戦後すぐのランタン谷の踏査記録は、故森本嘉一OBたちに大きな影響を与えたはずだ。また、シプトンを介してギャルツェン・ノルブとも交友があった。世に探検家、登山家と言われる偉人はあまたいるが、ティルマンの生涯ほど勇気を与えてくれる者はいない。青年期の孤独なアフリカ農場開拓と挫折、シプトンとの出会いと登山開眼、1936年のナンダ・デヴィ初登頂、パルチザン・レジスタンス活動、中央アジアとカラコルム探検、ヒマラヤ初登頂時代との決別、そして、終の住処、小型帆船による海洋探検は、放浪の生涯のすばらしい幕引であった。意外だと思われるだろうが、彼の探検活動の半分は高緯度海域の航海である。グリーンランド周辺、南氷洋の孤島、限りなく極地に近い島々を探検している。彼が普通の船乗り・ヨットマン、海洋学者と異なる点は、海にあって常にも登山家であり続けたことだ。南太平洋クルーズというような暢気な航海ではなく、無人島の未踏峰を求めて、記録の少ない氷雪の海を探検した。北極で誕生日を祝おうとしたが、季節が合わず南極に転進、フオー克蘭諸島に向かう途中で、行方不明となる。享年79歳だった。

彼は何事においても晩生で、登山を始めたのも(年下のシプトンを生涯、登山の師と仰いだ)、第二次大戦の参戦も(彼は予備役将校でありながら、若者に交じって、落下傘部隊を志願している)、航海術の習得もかなり年をとってからだった。頑固一徹が災いしたのか、なんとなく回り道の多い、要領の悪い生き方をして来た男だ。シャイな女嫌いで、かといってゲイの傾向はなく生涯独身、ストイックな無神論求道者ともいおうか。無口で無愛想、裕福ではあったが、およそ贅を凝らすということのない生活であった。

ティルマンは何故、海に向かったのだろうか。僻地好みの彼にとって、地球の七割が海であり、その究極の無人地帯にこそ未知が潜んでいる、と信じたからか。彼の魅力は常にその動機のシンプルさにある。探検家、登山家、航海者としての彼の功績があまりにも華々しいので、何か大げさな目標や理念を想像しやすいけれど、中身は実にシンプルで分かりやすい。厳格な行動規範と感情移入を廃した簡潔な文体からは、彼が放浪癖のあるロマンチストだとは見えなかもしれないが、それこそが逆説であって、本物のロマンチストは行為に生き、修辞粉飾を好まないものだ。

彼は常に出遅れてきたとも言える。歴史的探検と冒険パフォーマンズのはざまにあって、探検をするのには落ち穂拾い的であり(我々にとっては十分すぎる輝かしいフィールドではあるが)、地理的探検としての未踏峰登山よりもスポーツ的冒険としての処女峰登頂に重きをなす時代では、知

的で歳をとりすぎていた。組織的集団登山より個人的小人数登山を好んだティルマンは、エベレスト登山隊の隊長に推薦されていたのに、前人未踏の世界最高峰に背を向けて、海に向かう。彼の存在が、故に一つの権威、名誉と言ってもいい

らしいのに、彼はそういうものを最も嫌う。名を取らず、静かに山や海に対峙する姿は最高にかっこいい。質実剛健、重厚長大の古武士然としたナイスガイ、若者に交ざって、探検航海のキャプテンとして、時にはクルーとして、黙々と労務ともいえる船乗りの日々を過ごした。

彼は読書家だったから、きっと登山や探検においては、ウインバーやヤングハスバンドに影響されたように、海においては、スコットやシャクルトンの極地探検に憧れていたに

ちがいない。彼は、大英帝国のパイオニアたちの血を濃厚に受け継いだ男であった。スコットの南極での壮絶な遭難死やシャクルトンのエンデュアランス号遭難からの生還劇は読む者を圧倒する。しかし、同時代には英国のみならず、北欧にも、いや北欧にこそ優れた探検家がいた。ノルデンショルト、ナンセン、アムンセンらである。ティルマン少年は、英国が極地探検の競争に破れて行く様を、目の当たりに見ていたはずだ。彼の晩年の目標がこれら北欧の探検家の影響を受けていたことは間違いない。

憧れのノルウェー

私がティルマンの伝記と共に大きな影響を受けた著書は、南極点到達(アムンセン)、世界最悪の旅(チェリーガロード)、フラム号漂流記(ナンセン)、ユア号航海記(アムンセン)、エンデュアランス号奇跡の生還(シャクルトン)、実験漂流記(ボンヴァール)、海洋の人類誌(ヘイエルダール)などである。

私をノルウェーに誘ったのはティルマンとこれら海の男たちである。わずか二週間の旅であったが、北欧の自然と歴史を堪能した。かすかな縁の友人たちの歓待にも感激した。

旅の目的は、フラム号、コン。チイキ号の実物を見ること、沿岸定期周航船によるフィヨルドの船旅、そしてスカンジナビア半島最北端の岬ノール。カップを訪れることであった。旅の目的は120%満たされた。

知人(東京在住のノルウェー人、イエンス。ウルヴォイ)の友達というだけの縁で知り合ったベーター(物静かな小学校教師、27歳独身)のお陰で、オスロの休日はじつに実り多い観光になった。深夜のオープンカフェでの語らい、静寂の石畳、成熟した大人の街だと思った。治安は非常に良い、飲み歩いて午前様のホテルへの帰路、物々しい武装警備はイスラエルとアメリカ大使館のみで、警官の姿はほとんどなく、無人の公園を歩くのもまったく不安はなかった。ナチスに占領はされたが、戦火に会わなかったという市街は、18世紀の建物が現役で立ち並び、巨樹の並木がうっそうとして何とも品がある。驚いたのは公共交通網の素晴らしさだ。空港ターミナルや駅のプラットフォームに自転車が行き交い、バスも地下鉄も路面電車にも自転車、ベビーカーの駐車スペースがあって、乗り入れは自由だ。なにかにつけゆとりがあり、たたずまいが優雅だ。国土面積は日本と同じなのに人口は800万人、日本ではこのような住環境は永遠に訪れないだろう。

郊外にある彼の実家の農園の美しさは言葉に尽くせない。ゆるやかな丘陵と滔々と水をたたえた河の流れ、点在するレンガ色の民家が見事な原色の風景を割り出していた。村のビューポイントだと言って、連れて行かれた所は中世の教会跡だった。白夜の暮色に沈むその廃墟に老夫婦がたたずんでいた。平穏という一幅の絵画を見る思いだった。グリーグの組曲のなかにあるソルペ

イクの歌が耳奥に響いた。

ローフオーテン諸島にあるウルヴォイ家の皆さんには二度と経験できない贅沢を頂いた。彼らの所有する無人島(周囲 5 キロ程、地図にはウルヴォイ島とある)でのサマーハウスは自在に明滅する星屑に囲まれて、正にメルヘンであった。背後には懸垂氷河を戴く岩山、鏡のような濃紺の海、川のような狭い海峡で、イルカを見た。時々鯨も現れるというから驚きだ。妻と二人のいきあたりばつりののんびり道中、ヴァイキングの古郷はクルージングもフィヨルドも、最果ての漁港も美しかった。静かな北欧の大自然を満喫した

北の船乗り一本物の男たち

私が最も感動したのはフラム号だった。かのナンセンが北極海漂流で使い、そとてアムンセンの南極点初到達を成功に導いた世界の至宝である。(頑丈なだけのボロ船だけ)、フリチョフ・ナンセン(1861~1930)、極地探険家、オスロ大学教授、海洋生物学者、初代駐英大使、国際連盟の軍縮委員で人道主義者、ノーベル平和賞受賞、ノルウエーで最も尊敬されている偉人の一人である。これほどパーフェクトな人間も珍しい。彼の関わった全ての分野で一流の業績を残し、体力、知識、リーダーシップ、知的好奇心、人間的徳性、社会的地位、名誉、全てを兼ね備えた男である。(これで愛人に恵まれていたら、怒るで)

彼の発案で建造された木造帆船「フラム号」は特異な船体構造をしていて、北極海や南極海の氷圧にも耐えることができた。今、オスロ郊外の海べりに、博物館として現物が保存されている。北極海でのフラム号漂流(1893~6)は壮絶な探険である。特に、凍り漬けになったフラム号の漂流コースが北極点を通過しないと判って、犬ゾリとカヤックで極点アタックをする所は圧巻である。船を離れてたった二人、生還できると本気で考えていたのだろうか、壮絶な冒険だ。山岳会の諸氏にこの漂流記はぜひ読んでもらいたい。

極地探険記を読んで気づかされたことがある。空間的広がりと時間的奥行きとも言おうか、そのスケールの大きさに驚かされる。我々の日々の尺度がいかに箱庭的であるか、思い知らされた。中小企業の労働者が休日家族旅行を考えると、せいぜい二泊三日の温泉巡りで日々の疲れを癒そうとする。一部上場の大企業の中堅幹部が長期休暇を取ろうとすると、二、三週間のヨーロッパ周遊で嫁さん孝行の点数稼ぎをする。実直アルピニストがヒマラヤを夢見るとき、退職覚悟で二、三ヶ月の休暇願いを出す。人間の考える遊び(労務ではないという意味で)の規模はせいぜいこの程度のものだ。世間から見ても、とんでもなく長期の山行を持続して来た私でさえ、冬山計画は二、三週間、ヒマラヤでも最長九ヶ月も行って来たら、変人扱いされる。

空間的広がりとなると絶望的にせせこましい。温泉の行動範囲はバス停か駐車場から歩く距離ぐらいだし、ヨーロッパツアーは飛行機か車の点と線の名所巡りで、面の広がりほとんどゼロと言っていい。ヒマラヤにしたところで、キャラバンが少し広がりを感じさせるぐらいで、BC に入れば、山の中を上下するだけで、一種の大自然引きこもりと言えなくもない。それだけ濃密な行為とも言えるが、とにかく活動面積は広くはない。かつての極地探険は違う。第一に本国から目的地までの航海がある。地球を半周するのだから半端じゃない。目的地に着いても、極点までの距離が長く、出発を早春にするため、準備期間として越冬せざるをえない。結局帰国まで二、三年の計画となる。ヒマラヤはメートルで表すが、極地は緯度(海里、マイル)で表す。ナンセンの北極横断漂流計画は5年間であった。13名の隊員と犬、5年間の食糧と燃料、あの狭いフラム号の船室で越冬漂流する気分は想像を絶する。彼らの時間感覚、距離感覚は驚嘆に値する。

私といえば、豪雪に 7 日間の沈殿をするだけで恐怖にかられ、黒部横断を目論んで、はるか彼方の剣を絶望的に眺める。彼らは、7 ヶ月の越冬沈殿をし、乱氷打ち重なる氷原の方、視界にさえ捉えられない極点を希望して眺める。この感覚の違いはどこからくるのだろう。ノール・カップに立ち、白夜の北極海、その茫洋たる広がりを見ていると、何なく彼らの感覚に近づけるような気になった。荒涼とした不毛の崖が海に落ち込んでいる。夏でこれだから、涼てつく冬の暗闇はどのようであろうか。この海、この岩の大地で狩りをして命をつないできたノルマン人、ラップ人の生活は我々の想像の圏外にある。

極北の氷海を彷徨うナンセンらが、白熊一頭を捕獲し、これで 2 ヶ月は生き延びられる、陸地がきっと近くにあるはずだと喜ぶ、そんな状況が想像できるだろうか。高峰登山ではタンパク質より炭水化物が有効で、乾燥植物繊維やビタミン剤が必需品などと考えている我々に、残った生肉と脂肪の燃料で越冬漂流するその生命力があるだろうか。北の海の男たちは、肉体はもとよりその精神力においても超人である。

極地クルージングの夢

帰国後、エンデュランス号関係の本を三冊読んだ。想いは南極の海へ。コペンハーゲンからオーデンセの車中で、ノルウェーの青年が小型ヨットでドレイク海峡を横切り、南極大陸に接岸したという話を聞いた、帰路遭難したらしいが。ヨットによる南極大陸一周の記録もあるらしい。(現代の冒険、ボニントン著) 吠える南緯 50 度、裂ける 60 度、30 メートルの大波、どのような世界であろうか。シヤクルトンが 20 フィートのボートで脱出航海した南極の海に勝る冒険はないにしても、現代の冒険家の夢はまだ消えていない。南ジョージア島、エレファント島、夢をかき立てる絶海の孤島だ。厳冬の北極海から波濤逆巻く南極の海へ、ヒマラヤのようなやさしい自然でないことは確かだ。フラムは前進を意味し、エンデュランスは忍耐を意味する。名は体をあらわすと言うが、ともに遠征隊を率いた遠征隊を率いたナンセンとシヤクルトンの性質を表していて興味深い。

ヒマラヤにはティルマンやヘルマン・ブールのすばらしいパイオニア精神が刻まれてきた。アルピニズムを信奉する者はそれを鏡とするべきだろう。世界には、あまり人に見向きされない、しかし、圧倒的に美しく困難な山々が数多くある。ルートに至っては無限の創造性がある。末路峰や八千メートル峰の名に惑わされず、実のある本物の山に出会いたいものだ。フィールドが違って、その精神を培っていききたい。

海から見た百名山、これは深田久弥の日本百名山のように人が殺到するようにはならないだろう。書棚に大航海時代ぎょう書全 42 巻(岩波書店、1 巻 6000 円もする)がある。家康の命を受け、三浦接針が建造した日本製洋式船は、太平洋を初めて横断した。支倉常長はイスパニア船で太平洋大西洋を往復した。鎖国がなければ、きっと太平洋の島々にも雄飛していたにちがいない。キャプテン・クックが南極に向かったエンデバー号の帆船模型(高かった)は製作途中で埃をかぶっている。倭寇は、北前船は、漂流民は、海への興味は尽きない。

北海のかなた、南洋の果て、ヨットで氷雪に閉ざされた極地の島々を夢見る。流水の間を縫って、カムチャツカやアリューシャン、冬の利尻と知床を継続登山するのも面白いかも。ナンセンやシヤクルトンに寄り添えれば、望外の幸せだ。野放図な夢にふけっている極楽トンボはいまだ健在だ、と見栄を切っておこう。(とは言え、船酔いが克服できないのではすべては始まらない)